

京都教育大学 F D ニュース

No.106

2025 年 2 月 14 日

京都教育大学 F D 委員会

本学における F D 活動の一環として実施している「授業アンケート」へのご理解とご協力
を感謝申し上げます。

今回の F D ニュースでは、2024 年度前期授業アンケート、第 2 回 F D 研修会、授業アンケートの活用状況調査および 2024 年度後期教育学部授業中間アンケート実施結果調査、
について報告いたします。

1. 2024 年度前期授業アンケートについて

1. 調査の概要と実施状況

実施期間：2024 年 7 月 17 日（水）から 7 月 30 日（火）

実施科目：受講登録 6 名以上の全授業科目

対象科目数：359 科目 回収科目数：325 科目（全白紙 5 部除く）（実施率：90.5%）

実施科目登録履修者数：12,981 名 有効回答数：10,332 名（回収率：79.5%）

前回 2023 年度後期アンケートの実施率 91.3%および回答率は 78.7%と比べて、2024 年度前期アンケートも同様の実施率、回収率だったことがわかりました。

2. 潜在的プロファイル分析を用いた調査対象科目の特徴について

前回、2023 年度後期の授業アンケートの分析では、それまでの各項目の回答率の一覧を作成して、一項目ずつの回答分布を報告する方法から、項目全体の回答パターンに注目し、開講授業科目の特徴をダイナミックに把握する方法（潜在的プロファイル分析）を取り入れました。前は後期開講科目を対象としたので、今回の前期開講科目でも引き続きこの分析方法を取り入れることで、京都教育大学の開講科目を一通り網羅したことになります。

分析手続きは前回と同様に、回収した 325 科目を対象として、潜在的プロファイル分析を用いて各設問の回答プロファイルの特徴を描き出していきます。

受講科目の回答プロファイルを抽出するために用いた設問は以下の 13 項目としました（前回の報告と同じ設問を選択しました）。

Q2：この授業を受講するにあたってシラバスを参考にしましたか

Q3：この授業へのこれまでの出席状況を教えてください

Q4：この授業一回分の予習、復習、レポート、課題等に取り組むため、平均してどの位時間を費やしましたか

Q5：あなたはこの授業に意欲的に取り組みましたか

Q7：あなたはこの授業を受講してどの程度満足しましたか

Q8：あなたはこの授業で取り扱ったテーマ・領域に興味を覚えましたか

Q9：この授業には、教員になるための意欲を高める内容や取り組みが含まれていたと思いますか

Q10：あなたにとって、この授業の難易度はどうでしたか

Q11：この授業は体系的でよくまとまっていたと思いますか

Q12：あなたにとって、この授業の説明はわかりやすかったですか

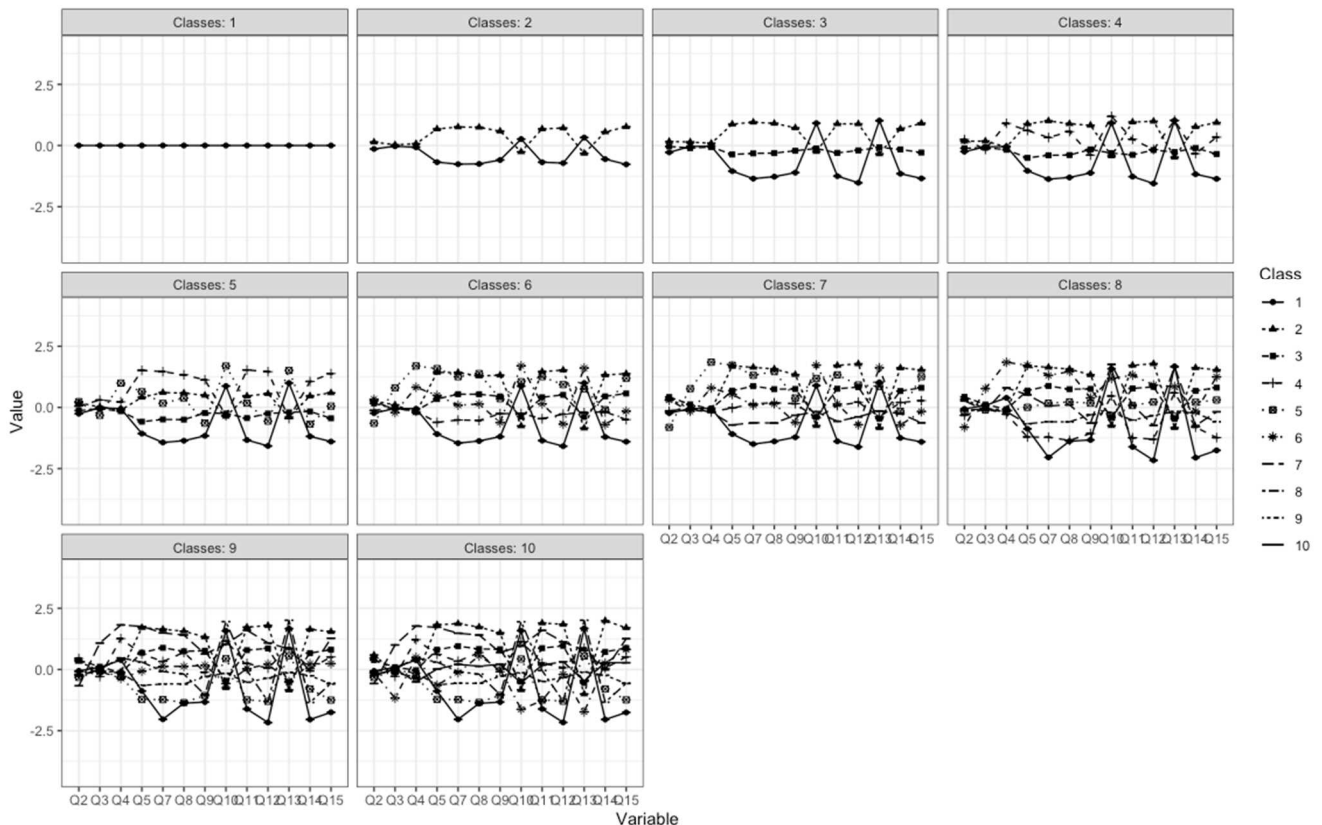
Q13：テキスト（配布物など）のレベルはどうでしたか

Q14：授業内容に対して、進む速度（進度）はどうでしたか

Q15：担当教員は受講生の理解や反応を受け止めながら授業を進めていたと思いますか

これらの項目は、得点が高いほど肯定的であると解釈します（Q10 と Q13 は、得点が高いほど難しいと感じたと解釈します）。この 13 項目の得点を基準として、潜在プロファイル分析を実行しました。

まず、339の授業科目を幾つのカテゴリに分けることが可能かを検討しました。差し当たり、10プロフィールまでを想定して分析を行った結果を以下に示します。



縦軸が標準得点（平均値が0になるように調整された得点）、横軸が設問項目を表しています。プロフィールが複雑になる過程を見ていくと、2つのクラスから構成されるプロフィール2では、Q5、Q7、Q8、Q9、Q11、Q12、Q14、Q15の8項目において得点が高低に分かれる段階から始まります。次に、3つのクラスから構成されるプロフィール3では、プロフィール2に加えてすべての項目において平均的な得点を示すクラスが出現しています。更に4つのクラスから構成されるプロフィール4では、プロフィール3において、Q5、Q7、Q8、Q9、Q11、Q12、Q14、Q15の得点が高いプロフィールを示したクラスの中から、Q4、Q10、Q13も高くなり、逆にQ9、Q12、Q14が低くなるクラスが分離したようなプロフィールを示しました。プロフィール5以降は、それぞれの高低に分かれた各クラスが更に別のクラスを派生し、複雑化していく様子を読み取れます。今回は、シンプルな解釈が可能と考えられるプロフィール4を最適解として、2024年度前期開講科目の特徴に迫ってこうと思います。

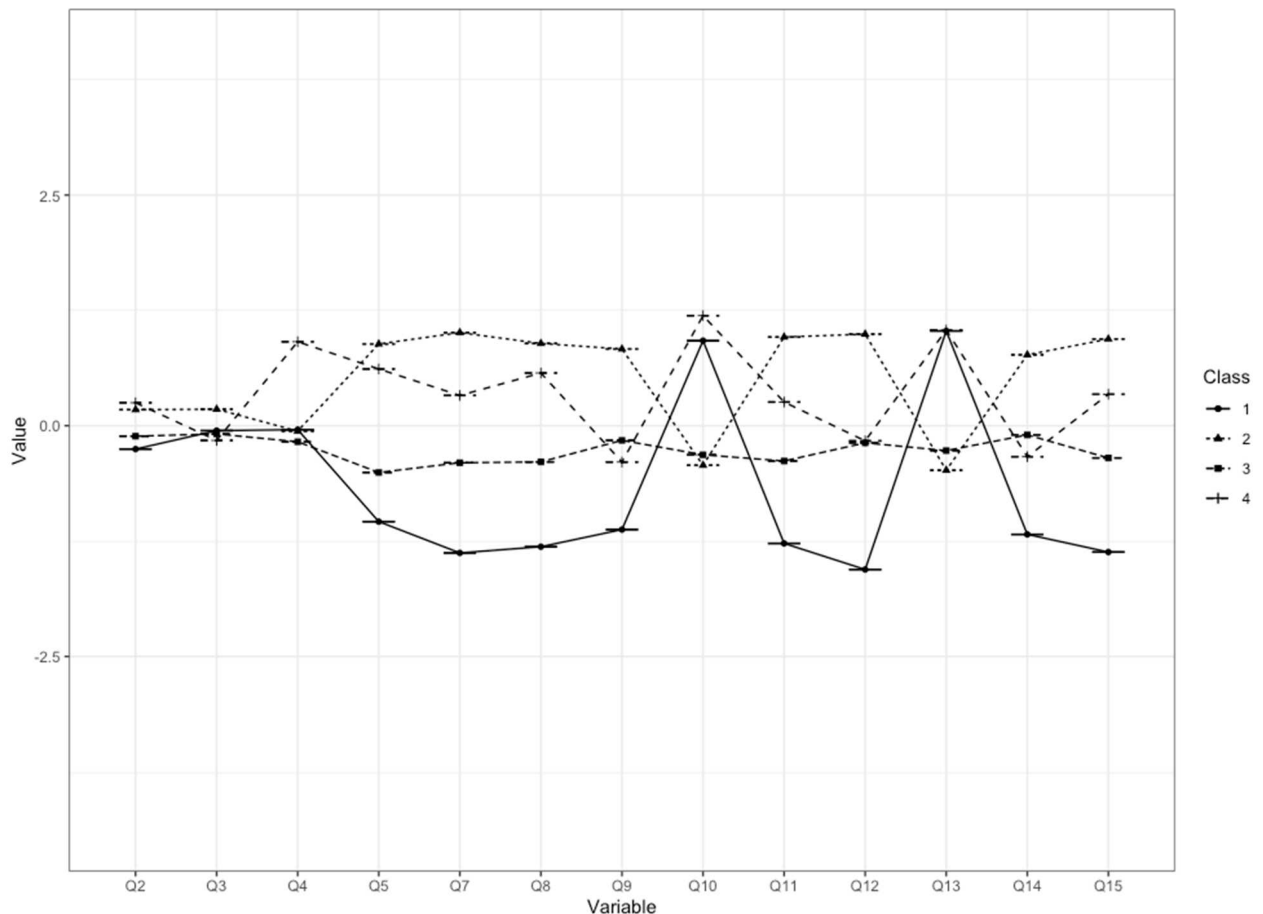
プロフィールが読み取りやすいように、4つのクラスから構成されるプロフィール4のみの折れ線グラフを以下に示します。

4つのクラスに共通していることは、Q2（シラバス参考の程度）とQ3（出席の程度）にはクラス間で違いが見られないということです。この結果は、履修において、シラバスの内容を参考にして授業を選択しているというよりは、本学の教育課程が免許法に則った科目が多いために、ほぼ必修あるいは選択必修となっていることによるのかもしれませんが。また、教養科目など選択の自由度の高い科目群においても、時間割の都合上、履修できる科目が科目数に比して少ないのかもしれませんが。また、出席状況については、本学の学生が押し並べて同じ程度の出席をしていることが読み取れます。

次に、Q4以降のプロフィールについて見ていきます。

クラス1は51授業科目が該当し、Q5（意欲的な授業参加）、Q7（受講満足度）、Q8（興味を覚えたか）、Q9（教員への意欲を高める内容）、Q11（体系的な授業）、Q12（説明のわかりやすさ）、Q14（授業進度）、Q15（受講生の反応の反映）の項目の得点が低く、Q10（授業の難易度）とQ13（テキストのレベル）の得点が高いクラスです。項目の内容を勘案すると、意欲的に授業参加せず、授業の満足度が低く、授業内容に興味を覚えず、教員への

意欲が高まらず、体系的な授業が展開されず、説明が分かりにくく、授業進度が適切ではなく、受講生の反応が反映されず、授業の難易度が難しく、テキストのレベルが難しい、という科目群だと解釈できます。



このクラス 1 とほぼ真逆のプロフィールを示した科目群がクラス 2 で 112 科目が該当しました。更に、すべての項目の得点が平均的であり、且つ得点差が認められなかったのがクラス 3 であり、128 科目が該当しました。最後に、クラス 2 と類似していますが、Q4（予習・復習・課題に費やす時間）の得点が高く、Q9（教員への意欲を高める内容）は平均的であり、Q10（授業の難易度）が高く、Q12（説明のわかりやすさ）が平均的で、Q13（テキストのレベル）が高く、Q14（授業進度）は平均的である、という点が異なるクラス 4 が抽出され、34 科目が該当しました。

FD の観点から考えると、クラス 2 が望ましい科目群と言えます。項目の内容から推測される受講者心理としては、体系的に授業が展開され、説明が分かりやすく、テキストのレベルや授業の進度が適切であることが、授業の満足度、授業への意欲的な参加、そして教員になる意欲を高めることに繋がるという、ある意味、とてもシンプルな心理構造になっていることが予測されます。また、クラス 4 のみ、予習・復習・課題に費やす時間が多いというプロフィールを示しました。これと関連していることは、授業の難易度が高いと感じていることテキストのレベルが高いと感じていることではないでしょうか。必然的に予習、復習、課題に費やす時間が必要になるでしょう。ただ、そのことが、教員になるための意欲を高めることに積極的につながっていないことが若干勿体無いようにも感じられますが、授業参加への意欲や授業の満足度、授業のテーマへの関心については得点が高いため、教職に関係なく、学問を学問として学ぶ楽しさを含んだ科目群がこのクラス 4 になるのかもしれませんが。

さて、以上 2024 年度前期開講科目の特徴を潜在プロファイル分析に基づいて概観してきました。前回の FD ニュースでも述べましたが、得られた結果はかなりシンプルで、要するに「わかりやすい授業をすれば受講生は関心を持つ」ということであり、逆もまた然

りであるということです。FD 委員会では、授業最後に実施する授業アンケートの他に、受講生の理解の程度を把握するための中間アンケートも実施しています。「わかりやすさ」を実現するためには、受講生の理解度がどの程度なのかを把握し、伝え方や内容を適時工夫しながら授業を展開していくことが必要なのかもしれません。中間アンケートも是非ご活用ください。

2. 2024 年度第 2 回 F D 研修会について

2024 年 9 月 26 日（水）13:00 から 13:50 に、第 2 回 FD 研修会が開かれました。第 2 回は、「『情報』をめぐる高校・大学の授業」というテーマで、京都教育大学附属高等学校情報科の山田公成（やまだともなり）先生と産業技術科学科の多田知正（ただはるまさ）先生に、それぞれご講演を頂きました。その背景には、2025 年度大学入学共通テストから「情報Ⅰ」が新科目として追加されること、大学においても 2025 年度から必修科目「情報機器の操作」が「数理・データサイエンス・AI」に置き換わるがあります。本研修会は、高校と大学における情報関連の授業科目の変化について知る機会となりました。

前半の山田先生には、「附属高校の『情報科』の授業において、高校生に何を伝えているのか」というテーマでお話を頂きました。「情報Ⅰ」は、1. 情報社会、2. 情報デザイン、3. デジタル、4. ネットワーク、5. 問題解決、6. プログラミングの 6 部で構成されており、情報リテラシー、プレゼンテーション、Web ページ作成、生成 AI の体験、暗号化、ロボットやドローンのプログラミングなど多岐に亘る内容が含まれることが紹介されました。これらを通してデータに基づく計算論的思考の涵養に努められていることを伺いました。「情報Ⅰ」が大学入学共通テストに新科目として出題されることで、それ以前と比較して変化したこととして、全ての学習内容にバランス良く時間配分する必要があること、PC 演習を協働的に行う必要があること、大学入学共通テスト対策を実施しなければならないことが挙げられ、入試対策に向けた授業の変化も紹介されました。山田先生は 2005 年度から情報科を担当され、長い経験に裏打ちされた多様な授業展開に感銘を受けました。

後半の多田先生には、「新科目『数理・データサイエンス・AI』について」というテーマでお話を頂きました。本科目は、文部科学省の数理・データサイエンス・AI 教育プログラム認定制度を受けて、「情報機器の操作」に代えて 2025 年度から開講される科目です。従来のパソコンの使い方に関する授業から、AI の基礎を学ぶ授業へとシフトすることが違いとして挙げられました。その背景として、PC を使える学生が当たり前になり、誰もが AI を使う時代に入ったことがあるようです。生成 AI は、コンピュータ、ネットワーク、Web、検索エンジンを用い、数値を決まった方法で処理して出来上がるもので、情報技術の発展の延長線上にある普通の機械に過ぎず、過剰に敬遠したり、過剰に依存したりすることは望ましくないとの意見を伺いました。また、受け取る人間の側が AI のデータから意味や感情を勝手に読み取って人間扱いしてしまうことの危険性も指摘されました。データの扱い方や応用数学の知識を基に AI の仕組みを理解することで、AI と冷静に向き合うことが出来るということなど、示唆に富むお話を伺うことが出来ました。

お二人の講師のご講演後に質疑応答があり、高校生の「情報」への取り組みの姿勢や、レポート作成における AI 利用の問題などの 5 件の質問があり、関心の高さが伺えました。情報を取り巻く状況の変化について知る有意義な機会になったと思われます。

3. 授業アンケートの活用状況調査および 2024 年度後期中間アンケート実施結果調査について

1. 今回の報告について

FD 委員会では、専任教員と非常勤教員のご協力のもと、本学における授業改善の一環として、①「授業アンケートの活用状況」、②「中間アンケート」および③「期末アンケート」を実施しています。

今回の FD ニュースでは、2024 年度後期に実施した「アンケートの活用状況調査」と「後期教育学部授業中間アンケート」について簡単に結果を記します。

2. 授業アンケートの活用状況について（調査期間：2024 年 12 月 16 日～12 月 27 日、Web 回答：16 通、紙回答：26 通）

問 1 過去の授業アンケートの結果を 2024 年度後期の教育学部の授業に反映させていますか。→図 1 参照

図 1 のとおり、「はい」の回答が 85% 強あり、好ましい傾向にあります。

問 2 授業に反映していない理由をご教示ください（自由記述）。

「アンケートを実施していない」と「本年が初年度のため」との回答が各 1 件で、前者は少人数授業の可能性もあります。

問 3 授業に反映させた内容についてお聞かせください（複数回答可）。→図 2 参照

回答件数が多い上位 5 項目は、「授業の説明を分かりやすくした」、「意欲的に取り組めるよう対応した」「受講生の反応を受けとめて対応した」、「教職への意欲・動機が高まるよう対応した」、「難易度を見直した」、「速度（進度）を見直した」と並び、授業改善を図っている教員の様子が見取れます。



図 1

図 2

3. 2024 年度後期教育学部授業中間アンケート実施結果調査について

問 1 独自作成のものを含め授業中間アンケートを実施した。→図 3 参照

「はい」が 80% を超えており、中間アンケートが定着しています。期末アンケートと比較すると、若干ながら周知徹底が弱いことは否定できないため、この実施率は改善が可能だと思われます。

問 2 授業中間アンケートを実施しなかった理由についてお聞かせください（自由記述）。

「人数が少なかった」、「時間が取れなかった」（2 件）、「少人数なので授業前後に聞き取っている」、「講義期間ではなかった」が得られました。少人数授業の場合、プライバシー保護を考えると実施しにくいのは仕方ないと思われます。一方「時間がとれなかった」については、授業担当者の工夫次第で改善が図れるかもしれません。「講義期間ではなかった」については、オムニバス形式の授業でアンケート実施期間が担当回ではなかったことが想定されます。

問 3 使用した様式についてお聞かせください。→図 4 参照

FD 委員会作成様式を使用したケースが約 9 割に達します。その一方、独自形式で実施したケースが 1 割強に及んでいます。独自形式の内容を FD 委員会で精査してみても良いように思われます。

問 4 中間アンケートを実施した結果についてお聞かせください。→図 5 参照

回答は総じて肯定的で、中間アンケートを実施する効用が見取れます。

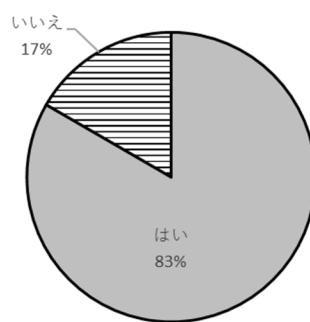


図 3

問 5 授業中間アンケートについて、受講生と話し合ったり言及したりされましたか。→図 6 参照
「はい」が 7 割弱であるため、フィードバックの観点に立てば、少なからず改善の余地があるように思われます。

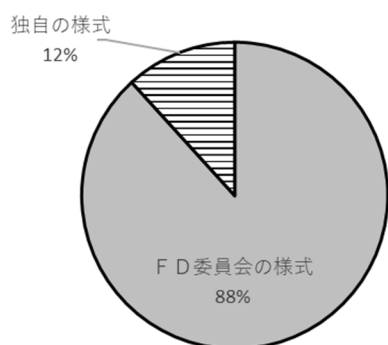


図 4

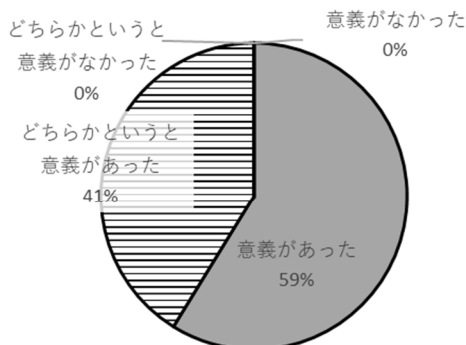


図 5

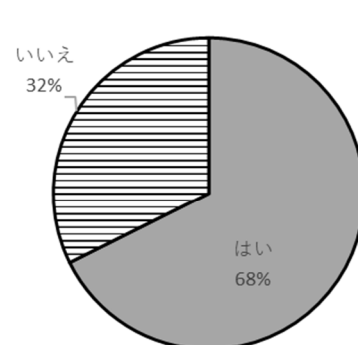


図 6

問 6 授業へ中間アンケートの結果を反映させた内容についてお聞かせください(複数回答可)。→図 7 参照

回答件数が多い上位 5 項目は、「授業の説明を分かりやすくした」、「速度(進度)を見直した」、「意欲的に取り組めるよう対応した」、「教職への意欲・動機が高まるよう対応した」、「難易度を見直した」と並びます。教員が自らの工夫で授業改善を図っている様子が読み取れます。

問 7 FD 委員会様式の「授業中間アンケート」の設問についてお聞かせください。→図 8 参照

「現状のままで良い」との回答が 9 割強ありますが、他方で 1 割弱は「改善の余地がある」としており、絶え間のない改善が期待されているといえます。

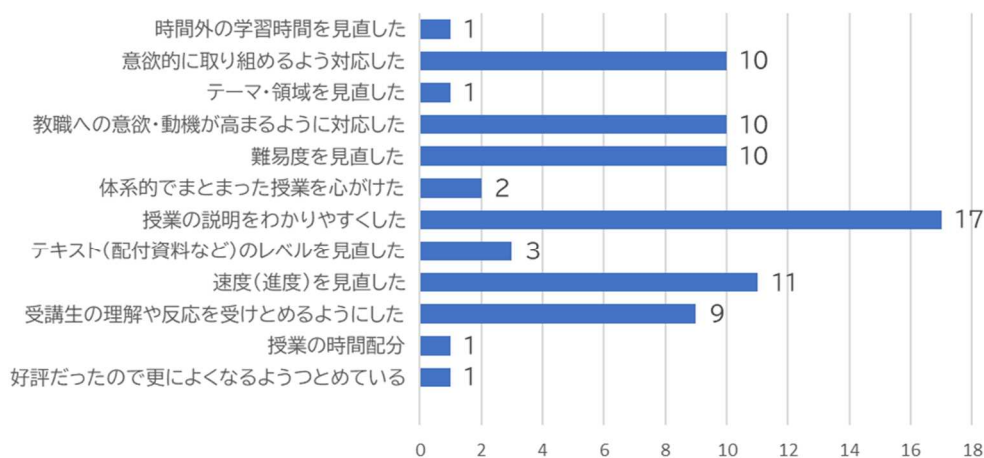


図 7

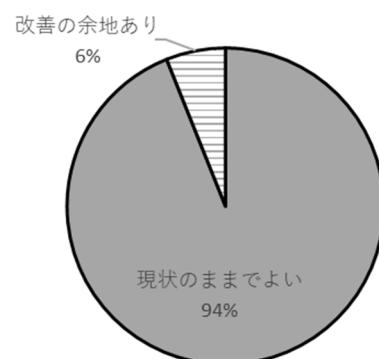


図 8

問 8 上の問 7 で「改善の余地あり」と答えた場合の自由記述。

「電子版にすべき」、「『思わない』と回答した場合の具体的な内容や希望を知りたい」、「実際に授業改善に役立つアンケートはオリジナルで作るしかないので、アンケートの見本としてこれでいいと思います」、以上 3 件の回答が得られました。真摯に回答いただけている様子がうかがい知れます。こんにちの学生たちの行動様式を考えて、FD 委員会でもスマートフォン等を活用した電子媒体での質問・回答の方略を鋭意検討中です。

内容について、問い合わせなどがありましたら、下記の委員までお願いいたします。

FD 委員会委員：相澤(伸)(委員長)、牛山、香川、小松崎、向井
(事務担当：糟谷、村田、首藤)